

Kwansei Gakuin University Research Center for Christianity and Culture

# RCC Newsletter

発行：関西学院大学 キリスト教と文化研究センター

https://www.kwansei.ac.jp/c\_rcc/ TEL:0798-54-6019

## RCC 創立二十五周年を記念して

関西学院大学キリスト教と文化研究センター（以下RCC）はこの四月に創立二十五周年を迎え、今年度三つの記念事業を計画しています。一つは、RCCの過去の歩みの振り返りを通して将来を展望しようとする「RCC創立二十五周年記念フォーラム」の実施です。これはすでに五月二〇日にこれまでRCCで責任を担ってこられた四人の研究者を招いて実施されました。もう一つは、二〇一九年度からの研究プロジェクト「映画とキリスト教」による、二十一世紀以降の作品を中心とするキリスト教関連映画

一一〇本の解説書の出版です。今年一二月の出版を見込んでいます。そして、最後の一つは秋学期に予定する、「映画とキリスト教」を主題とするシンポジウムの開催です。今回のニューズレターでは最初のフォーラムについてご報告します。

内外の講師によるフォーラム、講演会等を中心に活動し、その後は学内の研究者を中心に自ら研究を進めることに重点を置いてきました。まずは四人の先生方にそれぞれのRCCでの取組みを振り返っていただきます。

**樋口** 二〇〇五年度から二〇一三年度までRCCセンター副長として、主に聖書学に関わる研究プロジェクトを担いました。何れのプロジェクト

### RCC 創立二十五周年記念フォーラム 四半世紀の実りと展望

登壇者 元RCC教授・宗教センター宗教主事

名誉教授、元神学部教授

元商学部教授・宗教主事

神学部教授

司会 社会学部教授・RCCセンター長

樋口 進

神田 健次

山本 俊正

水野 隆一

打樋 啓史

### 四半世紀を振り返って

**打樋** 司会を務めます RCCセンター長の打樋です。過去にRCCでセンター長や副長の務めを担い、それぞれの研究

を開催できますことを感謝しています。RCCは関西学院大学の「キリスト教主義教育研究室」（一九六七年創設）を前身として、現代社会の諸問題へのより総合的な視点を持つ組織として一九九七年に発足しました。RCCの規程に「キリスト教と人間・世界・文化・自然の諸問題に関する総合的な調査・研究を行うとともに、本学のキリスト教主義教育の内実化を図ることを目的とする」（第二三条）と掲げられている通りです。最初の五年は学

も、基本的には複数の研究者が順番に発表と質疑応答を行い、最終的にその各自の研究成果を一冊にまとめて出版するという形を取りました。まず、二〇〇五年度から二〇〇六年度まで、「聖典と今日の課題」と題するプロジェクトに取組みました。現代社会が抱える諸課題を広く視野に含みながら、聖典（聖書）が持つ今日的な意義と、それを見出すための解釈を検討しました。成果は『聖書の解釈と正典』



を焦点の一つとしたプロジェクト「自然の問題と聖典」です。二〇一一年度から二〇二二年度まで取組みを進め、人間と自然との関係について聖典（聖書）の視点から探求しました。この取組みも『自然の問題と聖典―人間の自然とのよりよい関係を求めて』（キリスト新聞社、二〇一三年）として出版されています。

スの授業で三年間展開できました。研究成果や授業は神戸新聞や朝日新聞、NHKでも紹介されました。そもそもこの「ミナト神戸に宗教多元主義を探る」というプロジェクトは、九・一一の出来事を背景の一つとし、平和の課題を追求しようとするものです。関西学院大学の研究者が中心的なメンバーとなり、神戸の様々な現場で責任を持つ方々を研究協力者に迎え、キリスト教のみならず、イスラム教、神道、ジャイナ教、ユダヤ教といった諸宗教の施設等でフィールドワークを行いました。さらに、調査で取り上げたものの一つに、一九八〇年頃にユダヤ教

の関係を始め、その後、神戸の多様な宗教関係者が共同で実施するようになった「ピース・セレモニー」があります。一年に一度、平和のために異なる宗教の関係者が共同で集まるのです。神戸という地域は諸宗教の独特な共存の実態を持っていきます。そのことを皆で明らかに出来たのは意義深いことでした。



開かれた「読み」を目指して』（キリスト新聞社、二〇〇七年）として出版されました。次に、二〇〇七年度から二〇一〇年度まで取り組んだのが、「聖典と現代社会の諸問題」というプロジェクトです。その目的は、現代社会の種々の問題に聖典（聖書）の視点からいかに提言できるかを検討することでした。宗教間対話、同性愛、エコロジー、格差、生命倫理といったテーマを含んで展開し、その成果は『聖典と現代社会の諸問題―聖典の現代的解釈と提言』（キリスト新聞社、二〇一一年）に結実しています。そして、最後に環境問題

神田 センター副長を二〇〇五年度に、センター長を二〇一〇年度から二〇二二年度まで担いました。代表した研究プロジェクトとしては「キリスト教と平和構築」と「ミナト神戸に宗教多元主義を探る―（海）のシルクロード」の文化と宗教的共生」を担当しました。特に、後者の成果である『ミナト神戸の宗教とコミュニティ』（神戸新聞総合出版センター、二〇一三年）が井植文化賞（報道出版部門）を受賞できたのは幸いでした。それをきっかけに、研究の内容を関西学院大学での総合コー

『東アジアの平和と和解―キリスト教・NGO・市民社会の役割』（関西学院大学出版会、二〇一七年）として出版されています。基本的には学内の研究者による研究発表を実施すると共に、外部講師による講演等も行うことでプロジェクトを進めました。関わったメンバーの間では、次の三点の問題意識、理解が共有されていたことが重要であったと思います。まず、東アジアという地域の状況認識です。この半世紀、東アジアの国々は経済的には相互に緊密に結びついてきましたが、かつての歴史に対する認識の相違が深

刻な政治的分断を生んできました。次に、こういった東アジアの平和を脅かす危機を払拭し、平和構築を進めるためには、その主体としての宗教、NGO、市民社会という視点が意味を持つということ。そして、最後に、日本のキリスト教会が東アジアのキリスト教会にいかに関係してきたかという視点です。東アジアで戦争に加担した日本のキリスト教会の深い反省が、戦後の日本のキリスト教会の出発点です。そして、戦後の日本のキリスト教会が、アジアのキリスト教会と交流を始める

ことができたきっかけは、日

本のキリスト教会による、世界的なエキュメニカル運動への連携でした。RCCは『キリスト教平和学事典』（教文館、二〇〇九年）を出版していますが、平和を一つの焦点として持つRCCの活動の流れの上で、このプロジェクトも展開されていたと考えています。

**水野** センター副長を二〇〇六年度から二〇〇九年度まで、そしてセンター長を二〇一三年度から二〇一四年度に、そして少し間をあけて二〇一七年度から二〇一八年度に、それぞれ計二期にわたり務めました。まず、二〇一三年度から二〇一四年度には「現代文化とキリスト教」という研究プロジェクトを進めました。複数の研究者がそれぞれ漫画本、ミュージック・ビデオ、ミュージカル、映画、アフリカ系ディアスポラ文化、ホロコースト文学、ミュージカルといった多彩な切り口から研究を進め、発表を行い、その成果は『現代

文化とキリスト教』（キリスト新聞社、二〇一六年）にまとめられました。次に、二〇一七年度から二〇一八年度に進めた「ポップカルチャーとキリスト教」というプロジェクト

は、二〇一七年度にRCCの宗教改革五〇〇年記念行事が重なったため個々の研究発表の共有に留まりましたが、宗教改革五〇〇年記念行事としては山岡三治先生（上智大学）と蜷川順子先生（関西大学）による講演、ポスター展等を開くことができました。さらに、「キリスト教主義教育の展開」プロジェクトでは、キリスト教主義教育における平和教育に関する研究を進め、その内容は『キリスト教と文化研究』二〇号に所収されています。最後に、

関西学院大学の総合コースの授業開設のための共同研究として、二〇〇四年度と二〇〇五年度の二年間にわたって採用された「愛の研究」も、実質的にはRCCとの関連から生じたものです。その成果は『愛

を考える』（関西学院大学出版会、二〇〇七年）として出版され、実際に二〇〇七、二〇〇八年度に総合コースに授業提供されました。

## 質疑応答

【問一】これまでのプロジェクトで、苦勞した点や工夫した点を教えてください。

**樋口** どういった切り口で研究プロジェクトを進めるのかという点がいずれも課題でした。私の専門の聖書を基点に、そこからのように外に向けて貢献できるかということを考えてきました。例えば、震災や異常気象といった状況の中で、自然をテーマにしました。他宗教の方との協働もユニークな点でしたが、そういった視点とキリスト教の視点との接点を探るのは苦勞でもあり、また豊かな機会でもありました。

**神田** 「ミナト神戸と宗教」プロジェクトそのものはとても楽しかったです。苦勞した点

は、フィールドワークを受け入れてもらうことでした。また神戸には、震災や賀川豊彦といった大きなテーマがいくつもあり、どこに焦点を置くかはかなり議論しました。

**山本** 「東アジアの平和」プロジェクトでは、「平和」という概念をどう定義し、どの角度からアプローチすべきか、さらには、キリスト教がそこになければいけない点を考えていました。そこが苦勞したところでした。

**水野** 「現代文化とキリスト教」プロジェクトは、「カルチャー、ハイカルチャーのみならずポップカルチャー、サ

ブカルチャーにおけるキリスト教的表現を分析することで、キリスト教が公式に表現してきた自己理解との対比を試みる」という大きな課題を掲げました。ただキリスト教の自己反省まで至らなかつたという反省はあります。

【問二】ミナト神戸と宗教の研究はどこから着想を得たか。

**神田** きっかけの一つは『キリスト教平和学事典』です。ここで得た成果をどう展開するかということでのプロジェクトが出てきました。また個人的には、九・一一直後に神戸在住のイスラームの人々が大





## 今後のRCCに期待すること

きな恐怖を抱いていた状況を知り、神戸YMCAに関わっていたので、イスラームの人々を招いて交流の集いを企画いたしました。それを機会に、特に中央区には実に多様な宗教

とコミュニティが存在することに改めて気づかされたので、その個人的な経験にもとづくモチーフがRCCの平和研究の展開と呼応したと言えるとと思います。

樋口 『キリスト教平和学事典』はこういった類の事典がなかったことから、インパクトが大きかったと思います。ロシアのウクライナ侵攻という状況のなかで、キリスト教と文化という面からどういう貢献ができるか考えてみてはどうでしょうか。例えば、様々

な宗教から意見を聞きながら、平和の問題に新しい視点から何か提言をしてはどうでしょうか。

神田 『キリスト教平和学事典』をさらに発展させた研究を始めてはどうでしょうか。富坂キリスト教センターの共同研究『二〇〇年前のパンデミック』に参加しましたが、この時は神戸も大変でした。こういう研究を平和学と結びつけると、新しい視点が生まれるのではないのでしょうか。また、『RCCニューズレター』に挙げられた荻野先生の阪神モダニズムと賀川豊彦についての研究を読んで思ったのですが、この分野もまだ掘り起こすこ

とができるはずだと思います。

山本 今、キリスト教が戦争に加担するような文化がつけられていないかかと危惧しています。他方、キリスト教は戦争に対抗する平和の文化を構築できる可能性もあります。京都で「現在のウクライナ情勢とロシア正教会の歴史」をテーマに講師を招いた研究会に参加したのですが、その中で、プーチン大統領とロシア正教会が一心同体になっていて、キリスト教が戦争の文化に加担するような動きが起きているというのです。それに対抗する平和の文化を構築する研究を行ってはどうですか。

また、昨今の政治の状況を見ると、これまで社会を支えてきた価値観が意味を持たなくなってきたように思います。これに加えて、キリスト教主義教育の内実化と浸透も大切な課題だと思っています。キリスト教主義教育は宗教主事や神学部教員、キリスト者の教員や職員だけでなく、実は関西学院に勤める教職員全てが行うものという使命があります。キリスト者ないしキリスト教の理解者が減少しているなかで、キリスト教主義教育の内実化、展開、深化ということについても一度力を注



いでいただきたいと思います。

打樋 RCCは二十五周年記念事業として、『映画とキリスト教』をキリスト新聞社からクリスマスの時期に出版を予定しています。これには『ミナト神戸の宗教とコミュニティ』の井植文化賞の賞金を使わせていただきます。これにあわせて映画をテーマにしたシンポジウムか講演会を行う予定にしています。

四人の先生方、今日はどうもありがとうございました。これからもご指導、ご協力よろしくお願いします。

(報告者主任研究員 大宮有博)

## 編集後記



フォーラムはとても和やかな雰囲気で行われました。貴重なお話と提言をして下さった登壇者の先生方に感謝申し上げます。次号では、秋学期に予定している講演会やシンポジウムの報告を行います。

(T.O.)